

佐賀県研究成果情報

モモ「大玉あかつき」の棚栽培における果実品質向上と良質な結果枝確保のための新梢管理法					
[要約] 6月中旬に バウンティフロアブル 1000 倍液を散布するか、または6月中旬に 徒長枝抜き 、 新梢の誘引 、さらに 捻枝 を併せて行くと、 果実熟期 が促進され、 果実肥大 が良くなり、 果実糖度 が高くなるとともに 結果枝 として利用しにくい40cm以上の新梢発生が少なくなる。					
果樹試験場・落葉果樹研究担当				連絡先	0952-73-2275
部会名	果 樹	専 門	栽 培	対 象	モ モ

[背景・ねらい]

モモ栽培においては、立木または棚栽培などの栽培法の違いや新梢管理法の違いは果実品質やヤケ果等の発生、生理落果、さらには次年産の結果枝の形質に大きく影響する。また品種によって新梢発生の特性も違うことから、品種や栽培法に適した新梢管理法が重要である。そこで、「大玉あかつき」の棚栽培における収穫量と果実品質を向上させるとともに、良質な結果枝確保のための新梢管理法を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 1．6月中旬にバウンティフロアブル 1000 倍液を散布するか、または徒長枝抜き、誘引、捻枝を併せて管理することにより果実の熟期が早まり、最初に収穫できる成熟果実の割合が多く、さらに果実肥大が良くなり、収穫量も多い(表1、表2)。
- 2．バウンティフロアブル散布、または徒長枝抜き、新梢の誘引、捻枝を行うことにより次年産の結果枝として利用しにくい40cm以上の新梢の発生割合が少なくなる(表3)。

[成果の活用面・留意点]

- 1．棚栽培の場合は徒長枝の発生が多くなるが、過度な枝抜きは行わないよう注意する。
- 2．徒長枝抜きは時期を遵守し、硬核期を過ぎた満開後70日頃に行う。
- 3．バウンティフロアブルは新梢伸長抑制効果が高いため、連年使用は避ける。

[具体的データ]

表1 新梢管理処理の違いによる「大玉あかつき」の収穫量と初回収穫率

新梢管理処理	収穫量 (kg/樹)	収穫果数	初回収穫果率 (%)
バウンティフロアブル散布	25.7	83	53.8
徒長枝抜き・誘引・捻枝	19.9	68	64.7
徒長枝抜き	14.5	53	42.6

- 注) 1、バウンティフロアブル散布：6月中旬に1000倍液を散布。
 2、徒長枝抜き・誘引・捻枝の併せた処理：6月中旬に行った。
 3、徒長枝抜きのみの処理：6月中旬・10月初旬に徒長枝抜きを行った。
 4、収穫は7月16日、19日の2回に分けて行った。

表2 新梢管理処理の違いによる「大玉あかつき」の果実品質

新梢管理処理	果実重 (g)	果縦径 (mm)	果横径 (mm)	硬度 (kg)	糖度 (Brix)
バウンティフロアブル散布	308.9a	74.8a	83.0a	3.1a	12.6a
徒長枝抜き・誘引・捻枝	291.2ab	74.1a	81.6ab	2.0a	12.2a
徒長枝抜き	274.3b	71.9a	80.0b	2.6a	11.9a

注) Tukey-Kramerの多重検定により異なる英字間に5%水準で有意差有り。

表3 新梢管理処理の違いによる「大玉あかつき」の結果枝の発生と伸長

新梢管理処理	総伸長 (cm)	発生本数	結果枝の長さ別発生割合(%)		
			5~20cm	20~40cm	40cm~
バウンティフロアブル散布	2203.2	121.1	34.8	14.9	50.3
徒長枝抜き・誘引・捻枝	3866.1	184.2	30.1	22.3	47.6
徒長枝抜き	3681.7	134.3	27.3	7.8	64.9

注) 総伸長と発生本数は主枝1m当たり

[その他]

研究課題名：核果類の施設化を中心とした生産安定技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2001年～2005年

研究担当者：前山美和、稲富和弘、福田浩幸

発表論文等：2001年佐賀県果樹試験場業務年報